

母校の近況

好調だった大学進学者

— 大学進学状況 —

今年度は、国公立大学の入試制度が変わり①共通一次が五教科七科目から五教科五科目になり②各大学がA Bグループに分かれ、2校(CグループとDグループ)が公立大学を含めると3校が受験可能となった。しかし、自己採点方式の廃止や欠員補充の予則など新しい要素が加わり、従来に比して格段と慎重な出願がなされた。

その結果、本年度の国公立大合格者の延べ数は三二五(昨年二二一)となり、進学者数も増加した。しかもダブル受験が可能となったため、当然なことながらハイレベルの競争となり、得点率70%~80%の層が厚くなった。また、この受験方式のため成績上位者の浪人するケースは大巾に減少した。内容も東大(5)京大(6)などと充実して来たと言え、一方私大の合格者数は四七八(昨年四九一)であったが、難

関校の合格者数には大きな変動はなかった。地元の静岡大学の合格は常時県下で第一位を占めていて、現役合格数61(昨年63)で、県外勢の大巾な進出の中で殆ど変動がなかった。浪人を含めた合格数は75であった。また、本年度は県立大が新設され、Cグループとして入試を行ったので公立大の合格者が48(昨年14)と大巾に増加した。

本校においては常に建学の精神をふまえて堅実な教育を施し、その教育成果は着実にあがっていると言えてよい。授業と部活動、それに学校行事とのバランスがよくとれていて、「人間として大切なところ」を豊かにしながら受験の力をつけている。都市部で受験産業の重圧に押しひかれてバランスのとれた大学進学が期待できると思う。

| 区分 | 62年3月 | | 61年3月 | | 60年3月 | | 59年3月 | |
|-------------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|
| | 現 | 浪 | 現 | 浪 | 現 | 浪 | 現 | 浪 |
| 国立大学 | 171 | 85 | 128 | 63 | 108 | 56 | 144 | 42 |
| 公立大学 | 48 | 21 | 14 | 16 | 13 | 17 | 24 | 16 |
| 私立大学 | 267 | 211 | 269 | 222 | 174 | 235 | 240 | 217 |
| 短期大学 | 9 | 6 | 15 | 6 | 9 | 4 | 16 | 1 |
| 準大学・専門・各種学校 | 10 | 1 | 3 | 4 | 12 | 1 | 21 | 2 |
| 計 | 505 | 324 | 429 | 311 | 316 | 313 | 445 | 278 |

| 区分 | 現 | 浪 | 計 |
|------|----|---|----|
| 北海道 | 2 | 1 | 3 |
| 青森県 | 1 | 1 | 2 |
| 岩手県 | 1 | 1 | 2 |
| 秋田県 | 2 | 2 | 4 |
| 山形県 | 2 | 1 | 3 |
| 福島県 | 4 | 7 | 11 |
| 茨城県 | 3 | 2 | 5 |
| 栃木県 | 3 | 2 | 5 |
| 群馬県 | 2 | 3 | 5 |
| 埼玉県 | 13 | 3 | 16 |
| 千葉県 | 3 | 3 | 6 |
| 東京都 | 3 | 5 | 8 |
| 神奈川県 | 4 | 3 | 7 |
| 新潟県 | 10 | 3 | 13 |
| 富山県 | 3 | 1 | 4 |
| 石川県 | 1 | 1 | 2 |
| 福井県 | 1 | 1 | 2 |
| 岐阜県 | 1 | 1 | 2 |
| 静岡県 | 12 | 3 | 15 |
| 愛知県 | 1 | 1 | 2 |
| 京都府 | 1 | 1 | 2 |
| 大阪府 | 1 | 1 | 2 |
| 兵庫県 | 1 | 1 | 2 |
| 奈良県 | 1 | 1 | 2 |
| 和歌山県 | 1 | 1 | 2 |
| 徳島県 | 1 | 1 | 2 |
| 香川県 | 1 | 1 | 2 |
| 高知県 | 1 | 1 | 2 |
| 佐賀県 | 1 | 1 | 2 |
| 福岡県 | 1 | 1 | 2 |
| 佐賀県 | 1 | 1 | 2 |
| 熊本県 | 1 | 1 | 2 |
| 鹿児島県 | 1 | 1 | 2 |
| 沖縄県 | 1 | 1 | 2 |

全国高校サッカー選手権大会

東海大に破れ、決勝進出ならず
本年度のチームは、国体県代表G K・加藤とF W三上を擁し、中盤にも好選手が多く、新人戦中部大会優勝、同県大会2位、中央テレビ杯決勝で帝京を破り優勝など、幸先よいスタートで、全国大会への希望を持たせた。

しかし、夏頃からチームの調子が崩れ、高校総体県大会では一回戦敗退と、予想外の結果に終わった。その後、上昇ムードであったが、あと一步の壁が破れず選手権準決勝で敗退した。尚、G K加藤(3年)は選手権県大会のベストイレブンに選ばれた。

高校サッカー選手権結果
決勝トーナメント進出
優勝 藤枝東 2-1 日大三島
準決勝 藤枝東 0-1 東海大



体験志太中誌③

大正から昭和へ

村松秋雄

私たちが第二回生は大正一四年四月六日に入学し、昭和五年三月五日に卒業した。志太中に学んだ五年間の私たちは十二(三才から十七)八才までの少年期であった。

卒業以来五十七年にわたる人生経験を経て、当時を顧みるとその頃あたり前のこととして体験した学校生活についても、また当時知識不十分のため、無関心、無批判に順応した社会生活についても、今は別の価値観を通して甦ってくる思い出が多い。

体験志太中史①②においては、学校創設当時の校舎、運動場、生徒の作業等を重点的に取り上げていたので、私は別の角度から当時を思い起こしてみたいと思う。

当時私たちは当然のことながら

「教育勅語」の基本精神によって教育を受けた。現在の「教育基本法」の立場から見れば、笑止の沙汰と思われるようなこともあったと思う。その頃は「民主」ということばを使っていたが、処罰された時代である。

当時「修身」という教科があった。錦織校長が自ら各組を毎週一時間受持ち、日本国民としての精神教育を担当した。

また随時、校訓「至誠一貫」「新興の意気」等先生自らの教育方針についても熱のこもった教育がされた。

錦織校長の皇室崇拜思想は極めて強固であった。私たちが二年生の時に大正天皇が崩御(大正一五・一二・二五)され、その翌朝全員が生徒控所に集められ、奉拝式が行なわれた。式辞の途中、錦織校長が嗚咽して、式中中断してしまつたことがある。

大正天皇崩御と同時に昭和と改元され、その後校内において次々と皇室に関する諸行事が続いた。

御大葬遙拜式(昭二・二・七) 賀陽宮恒憲王殿下本校校臨(昭三・三・三三)、御眞影奉戴(昭三・三・〇九)、天皇即位大典奉祝式(昭四・二・二五)、奉安殿落成(昭四・二・二五)等が挙行され、その都度錦織校長の恐懼感激の姿が印象的であった。職員生徒一同もこれに追隨したことは勿論である。

私たちの入学直後に、陸軍現役将校学校配属令が公布(大正四・四・三三)され、日本で初めて全国中等学校以上において軍事教練が開始された。

志太中に最初に配属された現役将校は豊橋騎兵連隊からの野々垣一郎大尉であった。

日本はその頃から一路軍国主義国家への道をたどることになったが、今考えれば、私たちはその播種期に、将来の敗戦など夢想だにすることなく、真剣に軍事教練を受けたのである。

志太中のサッカー(当時は蹴球といふ)と上級進学教育は、この頃から有名であったが、卒業生が書いていっているので、省略す

ここで、お笑いぐさには私たちが二回生がつけた英語教員の名の由来を紹介したいと思う。

古い伝統のある学校では、先輩たちのつけたあだ名が踏襲されることが多いが、志太中初期の生徒は自分たちであだ名を考案することが得意であった。

桑原先生の「グリス」は先生ご自身の手記によれば、先生の最初の授業で一回生がつけたあだ名であるから、これは余りにも有名であるから、私がここで述べる必要はない。

二回生も一回生にならって、誰言うともなく、英語教員の名は、その先生が最初の授業で発音する英単語の中から考案しようということになった。

まず、佐野孫一郎先生は、あだ名のわながあるとは知らず、英文法最初の時間に、声高らかに「得々」と、特にEpockに力を入れて、教科書の題名を「The Epock Grammar」と読み聞かせた。これが運の尽きで、「イポック」というあだ名がついてしまった。

尾崎精英先生は、英語副読本の最初の時間「Lesson 1 The Earth」の読み方について、先生のEarthの発音が悪いといつて、先生が模範を示して、クラス全員に一人一人発音させた。授業終了と共に全員一致で、あだ名は「アリス」と決まった。

芹沢道太先生は、最初の時間に生徒が教室でガヤガヤ騒いでいたため、教壇に立つや否や、大喝一声、「Attention」と叫んだ。びっくりした生徒一同は即座に「アテンション」とあだ名を決めてしまった。

これらのあだ名は「グリス」程の評価は受けなかったが、私たちの在学中は校内で堂々と通っていた。

私たちの在校した大正末期から昭和初期の世相は、享楽主義の蔓延、左翼思想の台頭、経済不況による就職難がその特徴であった。

現在若い世代を「新人類」と呼ぶが、当時は時代の先端を行く青年男女を「モボ」(モダンボーイ)、「モガ」(モダンガール)という流行語で呼んだ。この世にも世代のずれは存在するものである。

「大学は出たけれど」という映画の人氣に象徴される通り、当時は未曾有の就職難時代でもあった。私たちが藤枝の町を見たのもその頃である。

私たちが三年生の終り頃に、共産党の一斉検挙(昭三・三・二五)があり、世間が騒いだことも覚えてい

その頃、私たちは少年で、法律のことはわからなかったが、私たちの入学直後に「治安維持法」という法律が制定(大正四・四・二二)されたのである。

錦織校長が生徒控所での訓話や修身の時間に、当時の風潮を「軽佻浮薄」と非難して「質実剛健」を説いたのも、また左翼思想の台頭を「思想国難」と呼んで悲憤慷慨し「国体護持」を力説したのもその頃のことである。

また、当時の不景気を反映した新聞記事の一つを附記したいと思う。

私は最近県立中央図書館保存の昭和初期の新聞(マイクログフィルム)の中から、次の記事を見つけた。

昭和五年二月二三日付、東京日日新聞(当時)静岡版

◎県立七校募集定員不足
二俣高女(3) 藤原高女(6) 藤枝高女(3) 志太中(8) 豆陽中(2) 藤枝農(9) 浜松蚕業(15)

不景気のどん底の時代であった。今の藤枝東高の生徒には想像もつかない事態であった。特に、農山村の疲弊は深刻であった。その頃米一俵が七円(当時は食糧制度はない)で学校の月謝は四円六十銭であった。

私たちの卒業式はその年の三月五日に竣功間もない講堂(昭三・八・八完成)で挙行された。

その思い出の講堂も五十九年間の使命を果たし、昭和六十二年十一月に取り壊された。そして跡地へは新しい図書館が建てられるとのことである。(62・11・30)

筆者は本校第二回卒。満州(中国東北)ハルビン学院、大同学院卒業後満洲国官吏。終戦でソ連抑留。帰国後行政管理局へ入り、静岡行政監察局長を最後に退官。現在浜松トッパン・ム(株)相談役。

陸上・テニス全国大会へ

☆文化の面でも活躍☆

高校総体で全国大会の出場権を獲得したのは陸上部の中村吉宏君(32HR)とテニス部の瀬津文さん(21HR)でした。

二人の記録は

中村吉宏君
男子八〇〇メートル
優勝
1分59秒2

瀬津文さん
1分55秒2
三位
1分56秒7

瀬津文さんの記録
個人女子シングルス
二位
二位
二位

東海大会 三位
東海大会 三位
東海大会 三位

なお、北海道で行われた全国大会では、両者ともベストを尽くしましたが、惜しくも敗退しました。

また棋道部は高校将棋選手権大会に参加し、決勝にまで進みましたが、亜山に敗れ準優勝でした。

その他、文化的な活動では、常葉学園記念論文コンクールの殿村純代さん(34HR)の「私と中国」が二〇〇余点の応募論文の中で最優秀に選ばれました。また角川文庫読書感想文コンクールで大石克子さん(36HR)は、県の最優秀に選ばれました。

学校行事である千南祭や体育祭も生徒の自主的な活動により充実したものとなり、良き伝統が築かれ、伝えられています。

事務局だより

同窓生の消息、活躍されていらっしゃる状況、著作された書物など、次回会報に掲載したいと思っております是非記事事務局へお寄せ下さい。

◆先般、同窓会名簿発行記念として委託業者「静岡宛名印刷」大橋忠氏(定一)より同窓会に旗を寄贈していただきました。横3m60cm、縦2m60cm、藤色のスクリーンカラーの布地に志太中、藤枝東高校の校章を配した見事な旗です。同期会などで利用されるのもよいと思えます。事務局にご一報下さい。

◆昭和六十三年度発行同窓会名簿は、一冊三八〇〇円です。若干残部がございますので、事務局へお申し込み下さい。

尾崎精英先生は、英語副読本の最初の時間「Lesson 1 The Earth」の読み方について、先生のEarthの発音が悪いといつて、先生が模範を示して、クラス全員に一人一人発音させた。授業終了と共に全員一致で、あだ名は「アリス」と決まった。

芹沢道太先生は、最初の時間に生徒が教室でガヤガヤ騒いでいたため、教壇に立つや否や、大喝一声、「Attention」と叫んだ。びっくりした生徒一同は即座に「アテンション」とあだ名を決めてしまった。

これらのあだ名は「グリス」程の評価は受けなかったが、私たちの在学中は校内で堂々と通っていた。

私たちの在校した大正末期から昭和初期の世相は、享楽主義の蔓延、左翼思想の台頭、経済不況による就職難がその特徴であった。

現在若い世代を「新人類」と呼ぶが、当時は時代の先端を行く青年男女を「モボ」(モダンボーイ)、「モガ」(モダンガール)という流行語で呼んだ。この世にも世代のずれは存在するものである。

「大学は出たけれど」という映画の人氣に象徴される通り、当時は未曾有の就職難時代でもあった。私たちが藤枝の町を見たのもその頃である。

私たちが三年生の終り頃に、共産党の一斉検挙(昭三・三・二五)があり、世間が騒いだことも覚えてい

その頃、私たちは少年で、法律のことはわからなかったが、私たちの入学直後に「治安維持法」という法律が制定(大正四・四・二二)されたのである。

錦織校長が生徒控所での訓話や修身の時間に、当時の風潮を「軽佻浮薄」と非難して「質実剛健」を説いたのも、また左翼思想の台頭を「思想国難」と呼んで悲憤慷慨し「国体護持」を力説したのもその頃のことである。

また、当時の不景気を反映した新聞記事の一つを附記したいと思う。

私は最近県立中央図書館保存の昭和初期の新聞(マイクログフィルム)の中から、次の記事を見つけた。

昭和五年二月二三日付、東京日日新聞(当時)静岡版

◎県立七校募集定員不足
二俣高女(3) 藤原高女(6) 藤枝高女(3) 志太中(8) 豆陽中(2) 藤枝農(9) 浜松蚕業(15)

不景気のどん底の時代であった。今の藤枝東高の生徒には想像もつかない事態であった。特に、農山村の疲弊は深刻であった。その頃米一俵が七円(当時は食糧制度はない)で学校の月謝は四円六十銭であった。

私たちの卒業式はその年の三月五日に竣功間もない講堂(昭三・八・八完成)で挙行された。

その思い出の講堂も五十九年間の使命を果たし、昭和六十二年十一月に取り壊された。そして跡地へは新しい図書館が建てられるとのことである。(62・11・30)